

東亞醫學

第七十號要目

◆ 投稿規定 ◆

讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

○支那に於ける漢方醫學の將來性 大塚 敬節

○漢方醫學の治療と其性格 大塚 敬節

○日本醫事新報の社説を検討し滿洲國及中國の漢醫問題に及ぶ 矢數 道明

○藥草栽培寸言 渡邊 武

○會報・雜誌

○編輯後記

支那に於ける漢方醫

醫學の將來性に就いての問題

——日本醫事新報の社説の迷論——

大塚 敬節

去る五月四日發行、日本醫事新報の社説には、『支那に於ける漢方醫、醫學の將來性』に就いてなる論文が掲載せられたが、該論文に就いては、既に東邦醫學六月號の社説に於て、主幹駒井博士が之を反駁し、更に東京支局長竹山氏も亦之に檢討批判を加へ、該論文の筆者梅澤社長の反省を促すところがあつた。

元來、日本醫事新報は、進歩的であり、その觸手に時局に敏感であり、その主張も亦概して公平無私で、吾人の夙に敬服して來た處であるが、支那に於ける漢方醫に關する梅澤氏の認識は頗る淺見偏狹である。殊に『支那の現狀は恰もわが明治初葉のそれに比すべく、明治政府が漢方醫の絶滅を期し、今日の日本醫學の建設の基を開いたと同じ方途を辿るほか、その方法もあるまいと思はれる』と云ふに至つては、吾人は先づ、此人を買被つてゐた自分の不明を恥ぢてをく。

支那の現狀の何處が、我國の明治の初葉に似てゐるか、これから先づ問題だ。漢民族の性格と日本人の性格の相違、支那の風土、風俗と日本の風土、風俗の相違、かうした問題を、全く無視して、明治政府が漢方醫を絶滅した様に、日本の官憲の力で、支那の漢方醫を絶滅し得ると、梅澤氏

が考へてゐるとすれば、この人は支那の土地と漢民族の性格を全く理解してゐないのである。

古詩源卷一の冒頭に収録されてゐる支那最古の歌謠は、

日が出ては作まき

日が入つては息まむ

井戸を堀つては飲まみ

田を耕しては食まふ

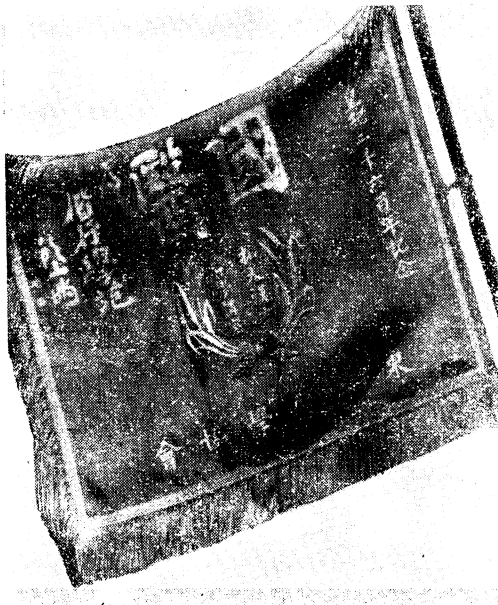
帝力我に何かあらん

であつて、我國の古歌

海ゆかば水づく屍山ゆかば草むす屍大君の邊にこそ死なぬかへり見はせじ

とは、なんとといふ大きな相違であらう。支那の土地とそこに住む民の性格を一切無視して、一片の机上論をふりかざして、支那の現狀を我國の明治の初葉に比するのは、梅澤氏の獨斷であつて、かゝる獨斷から出發する論説を社説として、日本醫事新報に掲げること、躍進途上の同志の面目を汚すばかりではなく、醫界の木鐸としての職責を全うする所以ではない。

猶ほ梅澤氏が明治初年に漢方醫の絶滅を期した爲に、今日の日本醫學の建設の基を開いたと云つて、跛行的に發達した現代醫學を是認するが如き口吻を漏らしてゐるのは、氏の從來の態度を知つてゐる者にとつては奇怪な話である。而して梅澤氏のかゝる態度の豹變に就いては、本誌本號より數回にわたつて、矢數道明氏が檢討を加へることになつてゐるので、氏の所説の詳細に就いての論議は省略し、氏の反省を促して擱筆する。



東亞醫學協會旗



矢數道明氏より會旗を受ける大宮原學堂

漢方醫學の治療と其性格

大塚敬節

漢方と申しますと、世間一般の方々は、直に煎薬を思ひ浮べることでありませう。なるほど漢方の薬は、世人が考へられてゐられる通り、その大部分が草根木皮の煎劑であります。時には丸薬や散薬を使用することがありますが、その十中八九は煎劑となつて居ります。それで漢方の特長は、この煎劑を使用することにあるかと申しますと、決してさうではないのであります。煎薬を用ひて病氣を癒す醫學は、他にもあります。漢方に限つてゐるわけではないのであります。たとへば、この頃流行のドクダミとか、ハブ草とか、或はソノシヨロとか或はキササゲとかを煎じて飲むことが、漢方だと思つてゐられる方が、漢方も知れませんが、あれは漢方ではない、原始的な民間療法であります。又ドイツやフランスの醫學では、旺んに草根木皮の煎劑を使用するさうであります。これも漢方とは申しませんが、現代の日本の漢方醫學は草根木皮を使用することが稀で、僅にウハウルシ葉、センナ葉、ゼネガ根、デキタリス葉等の數種を算へるにすぎませんが、これは明治の初年に、漢方醫學が漢方醫學と對立論争した時、草根木皮を使用する醫學は未開野蠻の醫學である、世間に向つて宣傳したため、自分達の奉じてゐるドイツ醫學が文明開化の醫學であること誇りがためには、なるべく人工を加へた化學藥品を使用しなければならぬ羽目になつて來つたのであります。斯くの如くにして獨逸では現在でも草根木皮が相當に多く、使用せられてゐるに拘らず

日本では化學藥品萬能の觀を呈してゐるのであります。話は少し古くなりまして、七八年前に還りますか、或る日一人の患者が、私にこんなことを話しました。私は先年横濱でドイツ人の漢方醫學に診て貰つたことがありますが、病氣が非常によく癒るので日本人も随分診て貰ひに行きま

す。私はこの話を聞いて、意外に思ひ、驚きました。ドイツ人で漢方を研究してゐるとは随分奇得な人であるわいと。そこで神奈川縣の藥劑師會長をしてゐられる清水藤太郎先生に御願ひして、そのドイツ人の漢方醫學に就いて、調べてみますと、その方はドイツの醫學者で、ドイツ醫學の流儀で草根木皮のみを使用してゐるのであつて漢方のことは少しも知らないといふことになりました。以上の様なわけでありまして漢方の特長は煎劑を用ふることであると、簡単に片づけることは出来ないのであります。それでは、漢方治療の特長は、どんな點にあるのであります。以下具體的な例を擧げ乍ら、順次話をすゝめて參りませう。たゞ一言御断りして置かねばなりませんのは、漢方醫學と支那醫學との關係であります。私達のいふ漢方醫學は、漢字と同じ様に、その發生は支那でありますけれども、長い年月の間に日本化されたものであります。現在支那では、日本で行はれてゐる支那醫學とは、少しく趣きを異にするのであります。漢方醫學といふ言葉は、日本にだけ用ひられ

氣管枝喘息の治療

支那では漢方とはいはないのであります。私はこゝで支那の醫學と、日本の漢方とがどんな點が似てゐて、どんな處が違ふかといふことを、お話ししなければなりません。支那醫學は支那大陸を背景として、漢民族の間に興隆した醫學であるに反しまして、漢方醫學は日本を背景として、大和民族の間に發展を遂げた醫學であります。それ故にこの醫學を皇漢醫學とも稱してゐるのであります。従つて漢方醫學には日本精神が流れてゐるのであります。漢方醫學の性格は即ち日本の性格であります。皆様はどうが私がこれからお話し上げる漢方の治療の中から、日本のものを御發見下さいますやう御願ひする次第であります。

それでは先づ氣管枝喘息の治療に就いてお話し上げませう。氣管枝喘息は世間に多い病氣であります。が、仲々癒りにくい病氣であることとされ、それで現代は現代の西洋醫學ではどんな治療をするかと申しますと、いろ／＼の内服薬、注射薬、吸入薬がありまして一時發作を抑へる效力のあるものを使用しますが、發作のない時に用ひて發作を起さなくする薬、つまり病氣を癒すといふ薬は殆ど見當らない状態でありませう。最近では外科的に迷走神経を切断するといふ方法も發見されましたがこれは氣管枝喘息は迷走神経の興奮と關係があるといふ理論から、これを切断しておけば、發作が起らないといふ考へから生れたものであります。ところが理論から案出されたこの方法は一見合理的であり科學的であるやうであります。が、實際の病人に應用してみますと、期待した様な効果がないと見えまして手術をしたがけが損であつた

といふ實例を吾々は見ております。これは丁度、風が吹けば桶屋が繁昌するといふ極めて單純な、一部を見て、全體を忘れた譬喩と同じ誤謬に陥つてゐるのであります。一般的に申しまして、西洋醫學では、物の觀方が、局所的であり、部分的でありまして、往々にして局所に捉はれて、全體を忘れんとする傾向があります。これに反し全體的でありまして、往々にして部分を見失ひ、局所を忘れんとする傾向があります。これはいづれも兩極端でありまして、吾々日本人のとならない處であります。日本の醫學即ち吾々の理想とする處の漢方醫學にあつては全體と部分の對立的關係において認めるのでなく、全體即ち部分、部分即ち全體でなければならぬのであります。この點に就きましては、後程、例を擧げてお話し致す積りであります。

大分前置が長くなりました。それで漢方醫學では氣管枝喘息をどんな風に治療するかといふこととこれをから申上げます。第一に診斷の目的が西洋醫學とは違つてゐる、この點に先づ注意を拂ひねばなりません。即ち西洋醫學では病名の判定が診斷の目的でありまして、病名が決定して、然る後に治療法がきまるのであります。ところが漢方の診斷即ち治療であります。病名の判定が究竟の目的ではないのであります。勿論病名の診斷を無用として斥けるのはありませんが漢方醫學には病名が判らなくとも治療法が確定するといふ診斷即ち治療である處の特異な診察法が備はつてゐるのであります。

その時にはどんな處方を與へたら癒るかといふ事を漢方獨特の診察法によつて診斷するのであります。西洋醫學では氣管枝喘息にはエフェドリンがよいとか、アストロールがよいとかといふ風に、病氣によつて薬を決めるのであります。漢方ではこの人の氣管枝喘息はこの處方でよくなるが、あの人の氣管枝喘息は、この處方ではいけないといふ風に同じ病名でも個人の體質の相違や、病狀の如何によつてそれ／＼使用する處方が違つて來るのであります。従つて漢方では抽象的な病名だけで薬を決めることは困難でありまして、實際に病氣に苦しんでゐる人を眼前に眺め乍ら、始めて治療法がきまるのであります。後程私が申し上げる様に漢法の治療が實踐的で具體的であるといふのは、かゝる點から證明されるのであります。考へてみますると、氣管枝喘息といふ抽象的なものでは、現實の世界には存在しないのであります。存在するものは氣管枝喘息にかゝつてゐる人、その人でありませう。その實際には存在せず、書物上の言葉の上だけで存在する病名を相手にしてゐる、病人は救はれません。われ／＼が癒してやらねばならないのは、病人であります。それなのにわれ／＼の處へ、神經痛の薬をくれとか、喘息の薬をくれとかいつて、手紙を寄すがあります。これは無理な注文であります。神經痛やい、喘息やい、といくら呼んで歩いて、返事をする人はいりませう。そんな抽象的なものを相手にしてゐては、病氣は癒りません。

日本では、われ／＼が生活してゐるこの國土がそのまゝで神の御國であります。神の御子天皇のしらしめす國土が即ち神國日本でありまして、この國土の外に神の國をば考へません。然るに西洋では自分達の生活してゐる國土は神の國ではなく、別に神の國が存在すると考へるのであります。この日本と西洋との考へ方の相違は、醫學にも現れて參りまして、實際に病氣に苦しんでゐる病人の外に、まだ別に病氣がある様に考へるのであります。漢方醫學の如き科學的醫學は、病氣の普遍性のみを求めて、これによつて一切の病人を律せんとする傾向がありますけれども、臨牀に際しては個々の病人の個性を無視しては、完全な治療は不可能であります。漢方醫學が精密な理論と堂々たる體系を備へてゐるに拘らず、個人の病氣を癒すといふ點で、かゝる都合を來し勝つてゐるのであります。そこで話を元へ還へしまして、然らば漢方では氣管枝喘息にはどんな薬を用ふるかと申しますと、そんなものは豫めきまつてゐるのではありません。形式的に型はめて、豫め薬を用意しておいてもそれで萬全だとは申せないのであります。

- (一) 小青龙加石膏湯
 - (二) 大柴胡湯合半夏厚朴湯
 - (三) 半夏厚朴湯
 - (四) 麻杏石甘湯
 - (五) 當歸芍藥散
- 以上の薬方を氣管枝喘息に用ふるには如何なる體質と如何なる病狀とを目標とするかといふ點になります。ここでは詳細をお話致しかねますが、小青龙加石膏湯は

(處方)大黃、黃芩、黃連、各一。

○右に熱湯一〇〇瓦を加へ三分間煮沸せしめ、滓を去り頓服す。以上一回量

○八味丸

(處方)乾地黄八分、山茱萸、薯

蕷、四分、澤瀉、茯苓、牡丹皮各三分、桂枝、附子各一分右煉蜜にて丸とす、一回量二〇以上一回量

○柴胡加龍骨牡蠣湯

(處方)柴胡二・五半夏、茯苓、各一・五、桂枝一・二、黃芩、大棗、人參、龍骨牡蠣各一・〇大黃〇・五 以上一回量

前學習院教授雜誌醫道主幹、日本醫道會々長、從六位勳六等 原田稔甫翁は神奈川縣下秦野小學校に於て六月三日午後十時半縣會議員推薦演說中腦溢血を發し翌四日午前一時溘焉として逝去せらる。

原田稔甫翁 急逝さる

翁は永年漢方醫道宣揚の爲め粉骨碎身別働隊となつて奔走されその功績は實に多大である。協會を代表し理事矢數道明氏告別式に臨み弔意を表した。

原稿募集

滿洲國及中國の漢方醫學及漢醫問題に對すあらゆる方面の原稿を募る。奮つて御投稿を乞ふ。

東亞醫學協會

會旗完成寄附金募集

本誌に寫眞を掲げて置きました様に、東亞醫學協會々旗が見事に出来上り、去る五月廿五日東京醫師會館の五周年記念大講演會の時に推戴式を行ひました。立派な皮箱付で全く上々の出来であると誰方からもほめて頂いて發起人として喜びに堪えません。松坂屋の奉仕的な努力に對しても深く感謝してゐるところであります。又旗の基地や色合ひ等の撰擇に就ては會員板倉てる氏の専門的知識をお借りしたのであります。

五月廿五日松坂屋から會旗完成の報を得て、發起人安達捨次郎、理事矢數道明氏が赴き受取つて來ました。早速その日の中に宮原先生のとこへ持參して御禮を申し上げ、いろ／＼と激まされました。翌二十三日早朝兩氏は再び會旗を持參して、頭山滿翁邸を訪れ、親しく翁に面會し、卓上に旗を擴げて御覽に入ると、温顔を微笑をたへて「ホ、これはよく出來た、この字はよく覺えてゐる、漢方はえゝ」簡單ながら力強い激勵の言葉も頂きました。

さて旗の作製費は全部で金百六十圓也であります。今迄の寄附金は別記の如くであります。この額に達する迄申込を受付けますから偕行學苑終了の方、第一回、第二回、第三回、終了の方、現在聽講の方々に御賛同をお願い申上ります。

申込方法

振替東京一一九、四三〇番へ
一口金五十錢、一口以上を裏面へ
會旗寄附と御記入の上御拂込み下さい。

發起人一同

東亞醫學協會幹部

漢方各大家の合議研究製劑

である故原料の精選と處方の的確は絶対他の追従を許さない

本劑は一時押への局處的藥劑ではなく胃腸の活力を健康と同じ様に恢復させる特點があるあらゆる胃腸藥にも満足しない場合にこの皇醫胃腸藥は最後の良藥としておすゝめする。

| | |
|------|------|
| 45錠 | .50 |
| 105錠 | 1.00 |
| 375錠 | 3.00 |

社 會 式 株

品 製 所 究 研 會 協 學 醫 亞 東

日本醫事新報社の社説を檢討し 滿洲國及中國の漢醫問題に及ぶ (一)

矢數道明

一、緒言

我が國に於ける醫事雜誌の權威あるものゝ中、漢方醫學に對する認識の程度に於て、流石に日本醫事新報は、他の群を抜いて時代の動向を夙く洞察し、機を見ること明、時を把ふこと敏なりと秘かに敬意を拂ふてゐたのであつたが、最近の同誌九二二號の社説「一支那に於ける漢方醫學の將來性」を讀むに及んで、意外にも從來の主張を翻へし、その無定見振りを曝露してゐることは、同誌のため寔に惜しむべきことである。

吾等は今回同誌の主張を檢討しつゝ、滿洲國及び中國の漢醫問題について論及し、日本醫學界の指導的地位にある同誌と共同責任の立場に立つて、この問題を眞剣に考究して見たいと思ふのである。

その理由として吾等は昨年臨時政府が中國の區制改革に着手し、その範を日本にとるべく湯爾和氏一行來朝の折に、北京特別市衛生局長候毓汶氏を通じて、中國の區制改革に當つて通すべき方針に就て對等の信する所を開陳したことがあつた。

又本年三月に至つて滿洲國より現新京民生部保健防疫課長、張繼有氏の來訪を受け、滿洲國に於ける漢方醫學を如何にして存續發展せしむべきか、又漢醫の再教育醫官機制定の方針如何につき親しく意見を交換し、大體意見の一致を見たことがある。

而して私は最近、現に滿洲國視察の途にある東京本草會主事栗原

わが醫界にも多大の問題を與へてゐるが、わが醫界の大體進出に當つても、差當り考慮すべきものは、大陸に於ける漢方醫學並に漢方醫の問題であらう。

(一) この件に關しては先般我が社が田村俊次氏を迎へて「北支事情を聴くの會」を催した時に、問題となつたが、席上田村氏は興亞院の松村氏の質問に對し、天津だけでも漢方醫は約千五百人位あり、各家庭に入らうと、支那では量的には壓倒的に多い旨述べられ、また下瀬謙太郎氏の言ふ處によれば、漢方醫の支那に於ける現在概算は百萬であり、其勢力は非常なもので一部知識階級を除いた一般民衆は概ね漢方醫の治療を受けたる現狀にある由であるが。

實に中國及び滿洲國に於ける漢方醫學及び漢醫の問題こそは兩國百年の大計の爲め、東亞協同體建設の爲め、日滿支三國が相倚り相助けお互に所信を披瀝し合ひ、その改革期に當つての施政方針を誤らねばならぬと思ふのである。されば今こそ全日本の漢方醫學家は其の信するところを率直に建言すべき重大時機と思はるゝのである。

それは單に漢方醫學のためとか、西洋醫學のためとかいふ偏したものでなく、そのいづれものためであり、東亞の眞の幸福のためにである。

か。されば當面の課題は、かゝるものに何等の未練をもたずまづ現代醫學の普及發達に努むべく、支那の現状は恰もわが明治初葉のそれにも比すべく、當時西洋醫としては蘭方醫、英醫、獨逸を學んだ者曉の星の如くに寥寥たる有様にも拘はらず、明治政府が漢方醫の絶滅を期しその非常な反對運動も斷乎排斥して邁進し、今日の日本醫學界の基を開いたと同じ方途を辿るのほか、その方法もあるまいと思はれる。

(二) 何分民衆の一般的知識水準は低く、而も夏季ともなればコレラ、赤痢等の傳染病猖獗を極める大陸のことであるから、その豫防治療を漢方醫學並に漢方醫に委ねておくことは大問題であり、その対策は緊要に考慮されねばならぬ課題の一つであらう。

二、醫事新報社説全文

順序として同誌が九二一號に、「一支那に於ける漢方醫學の將來性」現代支那醫界の課題と對策としての漢方醫學問題」といふ題目の下に述べられた社説全文を載録してゐる。

(一) 最近我が國でも漢方醫學の復興といふことが盛に唱導され

りを開きんとして東洋醫學の研究に着手してゐることは周知の事實である。

さて世界は今や新舊二勢力の急轉換が行はれつゝある過度期にある。流行の言葉は列擧する様であるが舊は即ち唯物的な分析的な個人自由主義的、一切の西洋的傾向ある勢力と新は即ちそれに對する一切の形而上的、綜合的、東洋全體主義的、日本精神的傾向の勢力とである。これは如何に否定せんとしても能はぬ時代の運命であつて、東西兩醫學の交流も亦必然な勢であらうと思ふ。

(三) 惟ふに今日、漢方醫學にあつては赤痢、チフスの豫防も、外科手術もやれず、それは今日當面の問題には役に立たない。従て差當り現代醫學の普及發達を圖ると共に、漢方醫學の再教育の問題こそ、支那の醫界に於ける今日の緊要な課題であらう。

三、古社説の檢討

問題の第一項に於て同誌が我が國の漢方醫學の勃興状態に注目し醫界にも多大の問題を與へてゐることを認めてゐることは公平な見解である。唯冒頭に我が國でも復興と云ふが、それは漢方醫學の復興といふことを盛に唱導してゐる國が、日本以外にどこかにあるのであらうか、勿論漢方醫學の復興が唱へられてゐるのは日本ばかりであつて、幾多の優秀性を蔽し乍ら、明治初年時代の潮流に押し流され、西洋崇拜の餘波に禍ひされて、法律的に壓迫されたため殆んど絶滅に瀕してゐたのであつたが、再びその優秀なる點が認められ、蔚然として復興の機運が醸成されて來たのである。又西洋諸國に於ては自國醫界の行詰

然るに今突如として二三氏の言によつて右に述べたる如き主張の急轉換をなすのは指導的立場にある大雜誌としての無定見の曝露と云はねばならない。

同社の「北支事情を聴くの會」に於ては興亞院の松村博士は漢方の綜合的全體の見方の特徴あることを賞揚し、西洋醫學の分析的弊習あることに論及してゐるのは吾等の日頃の期待を裏切らぬ博士らしい見方である。然し乍ら「煎薬の様な餘り價値のないやうなもの」を飲まして靜かにさせれば自然治癒が旺んになる」と言ふ博士付けたりのお言葉は少しく脱線で、漢方の實際に従事せぬ人々の言ひ易い言葉である。

心こゝにあらざれば見れども見えずである。漢方醫學の缺點ばかり搜してゐると、長所は一つもなくなつて、又見方によると長所も缺點に見えて來る結果、漢方醫學には取るべきものもなしなど、云ふ暴論を吐く様になるものである。特に百萬もある漢醫のことであつたらう。然し乍ら漢方醫と漢方醫學とを混同してはならない。この點京城帝大教授の杉原徳行博士は漢方醫學の美點長所に就て深く理解を持たれ、滿洲國漢方醫問題に就ては實に眞摯な主張をなして居られる。その具體的方法に就ては後述することゝして、博士は昭和十四年三月發行の總督府外務部主催の東滿地方巡回診察記に「滿洲國漢方醫問題に就ての私見」なる論文を發表し、漢方醫は斷じて存続すべし、そのために東洋醫學研究所を設置せよとこの理由内容を詳述してゐる。この點について又後に於て詳しく論ずることゝして第三の問題に移ることゝしてやう。(以下次號)

問題の第二項は同誌九一九號所載の田村博士に北支事情を聴くの會に於ける二三の人々の意見に従つてこの社説が書かれたことは想像に難くない。同誌八三六號の社説を見るとき、同誌八三六號に於ては「六萬同業奮起して東洋醫學を建設せよ」との主張の下に大陸醫療政策に關する件として、日本醫學をそのまゝ移植して當て飲めることは不可能で、民族の特性を考へ、お互に親和の念を以て兩民族の共存共榮の目的實現の爲めに相互扶助の謙虛さが必要であると述べてゐる。又越えて八三八號社説に於て「漢方醫學への再認識」と題して、一切日本のカテゴリーに統合するよりも支那は支那らしき方法によつて實績を擧げなやう、漢方醫の起用を忘れてはならないと論じ、更に八五九號に於ては「大陸醫療と漢方醫」と題して百萬の漢方醫を味方とすること、敵とすること、何れが眞の支親善であるか深く考へなくてはならぬ、漢方醫學及び漢方醫に科學的の洗禮を加へて、彼等の宿望と我等の抱負が一致する所に始めて大陸醫療政策の百年の大計が立つものであると、恰もわが東亞醫學創刊號卷頭言にて論じた主張を殆んどそのままを掲載してゐる。

藥草栽培寸言

渡邊武

近來洋藥畑では輸入防遏と代用藥獲得の立場から、藥用植物の採取栽培が熱心に考へられ、且實行に移されてゐるのに、最もその必要に迫られてゐる漢藥畑では實際問題となると、一向顧る人の無いのは、どうしたことか乎。

我が國に於ける藥草栽培の歴史は、遠く大寶令の制度に見られる如く、文武天皇の御代、大寶元年(紀元一三六一年)に始り、降つて徳川時代に至つては、各地に幕府諸藩を始め、各種の藥園が設けられ、邦産のものは勿論、朝鮮支那に藥種を求め、その栽培増殖に努め、現在の植物學及園藝學の發達に寄與する處も多かつたが、現在に於てその施設と當時の栽培植物の一般を窺ひ得るものに、東京帝國大學小石川植物園と大和宇陀郡松山町の森野藥園がある。

漢方、草藥に關心を持つ程の人なれば、一度は訪れて、往時を忍び、原植物に對する認識を深める必要がある。

大菩薩嶺の登山に鹽山町——詳しくは山梨縣東山梨郡鹽山町大字土於會——の高野氏の宅地を甘草屋敷と稱し、享保の始め(紀元二三八〇年頃)より年々甘草を將軍家へ上納し、藥種市場にも甲州甘草の名で出て居たことは、知る人少く、大菩薩嶺や甲州の山々に集るハイカーにも恐らく知られてゐないだらう。

吾人は之等往時の藥園の形態を採つた純漢方的な藥園の設立を、新鮮品の常備と原料藥種増産確保の上からも、希望するものである。藥草栽培は藥物の性質上、普通作物や園藝植物のそれとは根本的に異なる。

に相違した點多く、原産地では長年の間に夫々相當の苦心が拂はれてゐるから、實行に先つて豫め充分の調査が肝心である。

漢藥の植込みの際に、苗に可及的芽の新生部のみとし、古き株の部分及側根は附せざる方、生長宜しき如きは、花卉栽培より見れば一寸異様に感じられ、地黄苗の植込時期が六月中旬下旬と云へば庭園に植へて丁度その時分に外面紅紫色内葉黄色の鐘狀花を見らるる人には意外に思はれるだらう。之は開花を避けて根を肥大にする一手段である。

又開花を抑制して、肥大根を得る爲には常歸白芷栽培に見られる「芽切り」と稱する操作がある。調製法に於ては、常歸、川芎、芍藥、黃芩、人參に「湯通し」、黃連我蓮には「磨き」なる特殊操作が行はれる。

次に漢方の眼から見て、栽培を奨め度いものを擧げて見ると、地黃、細辛、人參、敗醬、瞿麥、紫參、附子、柴胡、菊、知母、射干、冬葵、紅花、牡丹、芍藥、紫苑、貝母、荆芥、麝香、馬鞭草、紫蘇、薄荷、款冬花、百合等が數へられ樹木類で杏、桃、山梔子、山茱萸、山椒、烏梅、吳茱萸、大棗、連翹、紫葳等がある。

之等には觀賞用としても、新來の草花に優る者多く、殊に樹木類は漢方家の庭園に植へ又は紀念樹とするも意義あることではなからうか。以下五月二十五日講演會の節頒布した藥草、種子、蕒改仁、當歸、人參、黃連、柴胡に就いて簡単に申上げる。

一、蕒改

ハトムギ *Coxia-cryma-jobi* var. *Frumentacea* 禾本科の一年生草木で、莖は四五尺に達する。暖地を好み、乾燥に失するは直しくない。従つて北海道、東北地方には適しない。土質は選ばず、普通の畑によく生育するが、排水良好で、適度の濕氣を有する填質、砂質、壤土なれば好種である。

(管理) 東京附近では四月上旬から六月上旬迄、就中五月上旬を適期とする。畦幅二二、五尺とし疎に條播又は二二三粒宛點播し、六一七分覆土する。反當播種量は點播で三升、條播の時四一六升を要す。

(管理) 播種後八一十五日で發芽するから、草丈一、五尺位に達する迄に一一二回除草、中耕、間引、施肥を行へば、莖葉繁茂後後手入を要しない。

(施肥) 吸收力強く、瘦地にも相當の收穫を得られ、中等度の地方の土地では、殆んど無肥料でも宜しいが、地力維持と收穫上、堆肥、人糞尿、大豆粕、過燐酸石灰、草木灰等を適宜選用する。

(收穫) 十月下旬頃、莖葉黃變し、大部分の果實の成熟した頃を見て刈取り、二一三日畑地に擴げて乾し、穀實を打ち落し、多量の時は回轉脱穀器が便利で能率がよい。篩別風選後、よく乾燥して貯藏する。收量は穀付で反當一〇〇貫内外、上作の時は一五〇貫に至る。仁に調製して約半量の五〇一七五貫が得られる。

(蕒改仁の調製) 穀實を充分乾燥し、篩に通して、粒に大小を選別したもの、或は穀實を半日一日本浸後蒸籠でよく蒸した後、充分に陽干したものを、粗摺臼で摺き、凡選篩別して外殻を除去し、更に精白して藥用に供する。(應用) 蕒改仁には脂肪、澱粉及び多量の蛋白質を含み、良好な榮養品で、現下の代用食としては推奨されるべきものである。又ハトムギ、煎餅其他の製菓用に供せられ、穀付のものを炒つて麥茶に代用しても味が良い。

二、當歸

タウキ *Ligusticum acutilobum* 繖形科に屬する山地に自生し、又は栽培せられる多年生の草木で莖の高さ二一三尺に達する。六一月の候白色の小花を繖形に綴り、全株特有の香氣を有してゐる。寒暖何れの氣候にも適し、強健で栽培は容易のやうであるが、莖葉のみ徒長せしめ、花を咲かすと根部の發育が悪い。當歸栽培は此の點に重點を置き、採種、育苗、苗の選擇、植込時期、施肥の方法等に特殊の考慮が拂はれてゐるが茲には省略する。萌芽は良好であるから、適宜播種せられ度い。但し産地に於ける當歸栽培では、四月上旬播種、一年間苗を仕立て翌春本圃に定植し、その秋收穫するものである。

漢方では周知の通り、利尿、鎮痛、消炎、解凝、緩下等の作用ありとされ、浮腫、皮膚甲腫膿汁、膿血、白帶下、疔瘻、發寒關節痛に用ひ、蕒改附子散、蕒改附子散、蕒改、麻黃杏仁蕒改甘草湯等に處方され、其他多くの方劑に加味される。

三、人參 *Ota-nin-jin* *anax Ginseng* 朝鮮滿洲原産の多年草で、藥用に供する根は、肥大紡錘狀にして草高二尺餘に達する。葉は長柄で輪生掌狀複葉、小葉は五葉。夏日淡綠色細小の五瓣花を繖形花片に排列する。果實は球形で紅熟する。頒布の種子は福島産のものである。温帯の氣候では何れの地方にも

總頁堂々七百六十餘頁

昭和十五年年度

拓大漢方醫學講座教材頒分

一、傷寒論金匱要略要方解説(一三六頁) 大塚敬節

二、漢方治療各論(一〇五頁) 木村長久

三、後世要方解説(三十七頁) 矢數道明

四、漢方治療各論(八十七頁) 矢數道明

五、漢方醫學總論(八十六頁) 矢數有道

六、漢方藥物學講義(七十三頁) 清水藤太郎

七、漢方醫學史學講義(九十四頁) 龍野一雄

八、鍼灸兪穴學治療學講義(一三三頁) 柳谷素靈

九、經驗藥方分量集(十一頁)

全揃金拾貳圓也爲替又は振替にて前金拂込の方には送料當方負擔、朝鮮、滿洲、中國は五拾錢増加。東京市牛込區新小川町二ノ七(温知堂内)

東亞醫學協會

電話牛込(34)二七七二番 振替東京一一九四三〇番

栽培可能であるが、寒冷の氣候を好み日光直射を忌む爲め、陽除けを設け、又は山の北側等の冷涼な場所を擇ぶ必要がある。人參の栽培は、地により異り、又相當の技術と管理を要するもので誌面の都合で詳細は略す。

四、黃連 *コウリン* *Coptis Japonica*

本邦特産の宿根草で山地の樹蔭地に自生する。葉は根生で鋭鋸齒を有し早春白色の小花を開く。

栽培品はキクバワウレン、セリバワウレンの二種であるが、頒布の種子は、最近東京近郊で採取したセリバワウレンの種子である。之も日光の直射を忌から、冷涼な樹陰地で排水良好な處を選び播種する。播種時期は通常晩秋より早春にかけて行ふが、種子の貯蔵が面倒であり、最新鮮の種子であるから取播を行つたが宜しいと考へる。

直播栽培を行はない時は、苗床に播種後二年目の秋本圃に定植する。高さ四尺位に日除棚を作り日光の直射を避け、收穫は定植後三―五年目の秋行ひ根莖を掘起し莖葉及び土、鬚根を除き陽乾し尙残れる鬚根は弱き火に點じ焼却し、磨きをかける。

五、柴胡 *ミヤマサイロ* *Bup. leurnum scorzoneraefoliumst enophyllum*

之は現在未だ市場には栽培品は見ないやうであるが、年々收穫減じ肥大なる良品少く、且需要の増加するものであるから、野生品の増殖と栽培に努め度いと思ふ。頒布の種子は富士山麓採種のものである。同地方は豊富な所謂三島柴胡の産地であるが、今春同地採種の途中、沼津の山出半次郎翁に伺

へば、往時小田原藩主は大いにこの増産に意を用ひ、採種したものを袋に入れ、首に吊し、方々播種させられた由で、吾人は間接に尙今日迄此の恩恵を蒙つてゐるものである。

我々は野生品の採取利用と同時に、此の美學に倣ひ、野生品の保護と増殖に努め度いものである。

東亞醫學協會々

旗寄附者芳名

- 五圓也 拓大第三 安達捨次郎殿
- 同終了 野田一之助殿
- 三圓也 井上 眞道殿
- 同終了 相川 かつ殿
- 二圓也 廣野 賢助殿
- 同終了 深堀 賢治殿
- 一圓也 永田八四郎殿
- 同終了 葉上 照澄殿
- 矢口 智康殿
- 高橋 庄三殿
- 村上 久男殿
- 沖野三郎殿
- 前川せつ子殿
- 田村 芳吉殿
- 櫻庭 富作殿
- 三尾 三郎殿
- 三上 平太殿
- 山本平一郎殿
- 破名城孫位殿
- 福山 省吾殿
- 拓大第一 氣賀 林一殿
- 同終了 小林三次郎殿
- 借行學苑第 宮本守太郎殿
- 一回終了 第四回聽講生
- 村上 顯殿
- 白石 吉治殿
- 合計 金五拾五圓也

本誌代納入者芳名

- 東京 小林三次郎殿
- 池田 亨侃殿
- 倉田 省三殿
- 岩田 基宜殿
- 宮尾 三義殿
- 金子 正康殿
- 矢口 智康殿
- 高柳 米壽殿
- 高橋 庄三殿
- 三上 平太殿
- 武井 嘉隆殿
- 破名城孫位殿
- 原田 菊野殿
- 井上 眞道殿
- 山本平一郎殿
- 重本 武助殿
- 田中 勇殿
- 鹽月 精平殿
- 柳口 仁殿
- 崎玉 英一殿
- 高澤 務殿
- 柳澤 信一殿
- 村岡 松聖殿
- 天野 四郎殿
- 相澤 豐吉殿
- 清水 芳吉殿
- 田村 恭一殿
- 森 文通殿
- 吳 文通殿
- 臺灣 文通殿
- 二圓四拾錢也
- 東京 石野 信安殿
- 大阪 養命 閑殿
- 都志藤三郎殿
- 陳炳 坤殿
- 二圓也 臺灣 陳炳 坤殿
- 一圓也 臺灣 陳炳 坤殿
- 一金拾圓也
- 神奈川 特志 家殿

五周年記念講演會出席者芳名

- 神崎 勘爾氏
- 板倉 てる氏
- 小出 壽氏
- 足立捨次郎氏
- 野根益太郎氏
- 菅根益太郎氏
- 野島 亂氏
- 小島 修造氏
- 安岡 仲泰氏
- 西澤 生惠氏
- 杉野嘉治雄氏
- 河野 伯道氏
- 柳谷 素靈氏
- 高橋庄三郎氏
- 高橋庄三郎氏
- 森 英雄氏
- 柳島 信夫氏
- 野田一之助氏
- 木村 はな氏
- 白石 吉治氏
- 姜 德 順氏
- 石原 保秀氏
- 大河内義之氏
- 鈴木 泰助氏
- 海老塚吉次氏
- 田島増次郎氏
- 高柳 米壽氏
- 渡邊 靜子氏
- 佐々木正氏
- 原田 菊野氏
- 中内 善馬氏
- 深瀬 眞逞氏
- 小林三次郎氏
- 井上 眞道氏
- 海野 こう氏
- 矢口 智康氏
- 井上 久康氏
- 安西 安周氏
- 竹山晋一郎氏
- 林 晴世氏
- 深堀 賢治氏
- 石野 信氏
- 崔 圭 謙氏
- 金 石氏
- 糖澤子之藏氏
- 三上 平太氏
- 武井 勇善氏
- 上原あさじ氏
- 崎濱 秀明氏
- 荒木 性次氏
- 矢數 道明氏
- 氣賀 林一氏
- 松浦 巖氏
- 田尻 治男氏
- 岩田 基宜氏
- 洪 仁 杓氏
- 破名城孫位氏
- 牧寺 節氏
- 河西 貢氏
- 内山 みち氏
- 渡邊 武氏
- 合葉 仁氏
- 横澤 賢氏
- 龜岡 晋氏
- 山本平一郎氏
- 山本平一郎氏
- 吳 再 一郎氏
- 前川勢津子氏
- 鎮田 良雄氏
- 小椋 章道氏
- 宮本守太郎氏
- 木村 長久氏
- 原 啓子氏
- 大津山榮子氏
- 龍野 一雄氏
- 宮原 民平氏

借行學苑創立五周年記念大講演會

昭和十五年五月廿五日といふ五の字の三つ重なつた御日出度い日にわが協會の前身借行學苑創立五周年記念大講演會が神田の東京醫學會館で開催された。朝來の雨にも拘はず近來稀なる出席者多數にて満員の盛況であつた。

編輯後記

○今月號は巻頭で大陸の漢方醫問題を取扱つたが、此の問題は更に矢數道明氏が今後三ヶ月間に互つて、討議することになつてゐる。明治時代の古めかしいイデオロギイを、無理強ひに押しつける人々への抗議が、各方面の新人によつて提起されてゐるが、明治時代に陳腐なりとして嘲笑せられた漢方醫が今や時代の新人として我邦の醫界に登場せんとしてゐることは何といふ皮肉であらう。

○大塚氏の『漢方醫學の治療とその性格』は、嘗て水戸市に於ける原民平教授より理事矢數道明氏授講演に筆を加へたものである。渡邊武氏は和漢藥の研究家として知られ、目下植物園にも勤務した事があり、津田東京帝大生藥學科に於てアルバイトを續けてをり將來を囑目せられてゐる新人である。

「東亞醫學」合本頒布

昭和十四年二月創刊號より、昭和十五年五月迄全十六冊を合本となし、全百二十八頁を美麗なる裝幀を施し、借行學苑五周年記念として希望者に頒布す。部數に制限あり至急御申込を乞ふ。

東亞醫學協會

電話牛込二七二番
振替東京一九、四三〇番
東亞醫學を製本御希望の方でお手許に全部揃はない場合、協會に残部がありますから御申込下さい。一部拾錢也。
但し創刊號と八號とは全部拂底です。その他のもので不足がありましたら御申越して下さい。